

孟母三遷？

松本 康子

「孟母三遷」などと書くのは大げさだが、親が子供によりよい教育を受けさせたいと考えるのは、世の常だろう。

アメリカでの住居探しは、子どもの教育と深い関わりがあることを、一歳半で連れてきた長女の教育で知った。長女は高校卒業までに5回の引越しを経験した。その1回ごとに、私達夫婦が子どもの教育を考えた上での理由がある。

幼児期 - 小学校

最初は、何も考えずにレントが安いというだけで、ロサンジェルス・ノース・ハリウッドにアパートを借りた。実際に生活し始めてみると、移民、住宅難、貧富の差、教育格差、安全性、多様な言語等の真っ只中にある現実を知った。住むところによって、与えられる環境も千差万別だ。住宅選びと教育環境の選択は、私達夫婦の親としての責任だと感じた。

次に、主人の大学の、家庭を持った学生のためのアパートに住んだ。主人がここを選んだのだが、はっきりした理由があるという。留学生にはありがたい家賃と、安全な環境にあるのが魅力な事。また、大学関係者の子どものための Toddler School (18ヶ月からの、よちよち歩きの幼児のための園) があり、1日も早くアメリカに慣れさせるためには、この幼稚園に入れるのが一番いいという事。ただ、親も先生の手伝いをしなくてはいけない Co-operate 方式の幼稚園だったので、言葉のハンディを考えた上で、私自身の選択に任された。

見学に連れて行ってもらった。赤ん坊に毛の生えたような子どもでも、曲に合わせて一生懸命歌を歌いながら、身振り手振りを入れて踊っている。危なっかしい手つきで粘土こねをしたり、はさみを使ったりして遊んでいる。グループに分かれて、本を読み聞かせしてもらっている。アメリカに馴染むための、初めての学校としては恵まれた環境だった。

長女は、トドラー・スクールから始まり、5歳児までの幼稚園を卒園するまで、良きにつけ悪きにつけ、子ども社会に揉まれ、順応していった。

主人の大学院修了に伴い、小学校1年生の途中で転校した。滞米が長くなりそうだという事で、それまで補習校に行かせていたが、子どもに纏まった期間、日本語教育を受けさせたいと考えた。思い切って一学期間の体験入学をさせるため、2年生の3月に日本へ一時帰国した。

3年生の進級に合わせてアメリカへ戻り、日本人の多く住む地区へ引っ越した。この時点で、滞在生活が7年目に入っていた。それまでは、アメリカの環境に慣れる事を最優先させる生活だったのを、アイデンティティを確立させられるような環境に入れる目的で、体験入学に引き続き、敢えて日本人の多い地区を選択した。

同じような環境に育った日本人の子どもに接した事で、初めて、アメリカで生活する自分を意識する事になる。思春期に入った頃は、アメリカと日本の狭間で、どちらのカルチャーに属しているのかを、しきりに口にするようになった。ここで、5年生までを過ごした。

最後に、第一言語としての日本語の心配はなくなったと判断し、英語環境に戻すため、6年生で再び日本人の全くない地区へと、4度目の転校をした。

小学校を4度も転校させたことに、後になって自分自身驚いた。カッコよく「孟母三遷」のつもりでいたが、一步間違っていたら不適応を起こしたかもしれない選択になったかもしれない。新しい環境に順応してくれた子どもに感謝すべきだろう。

